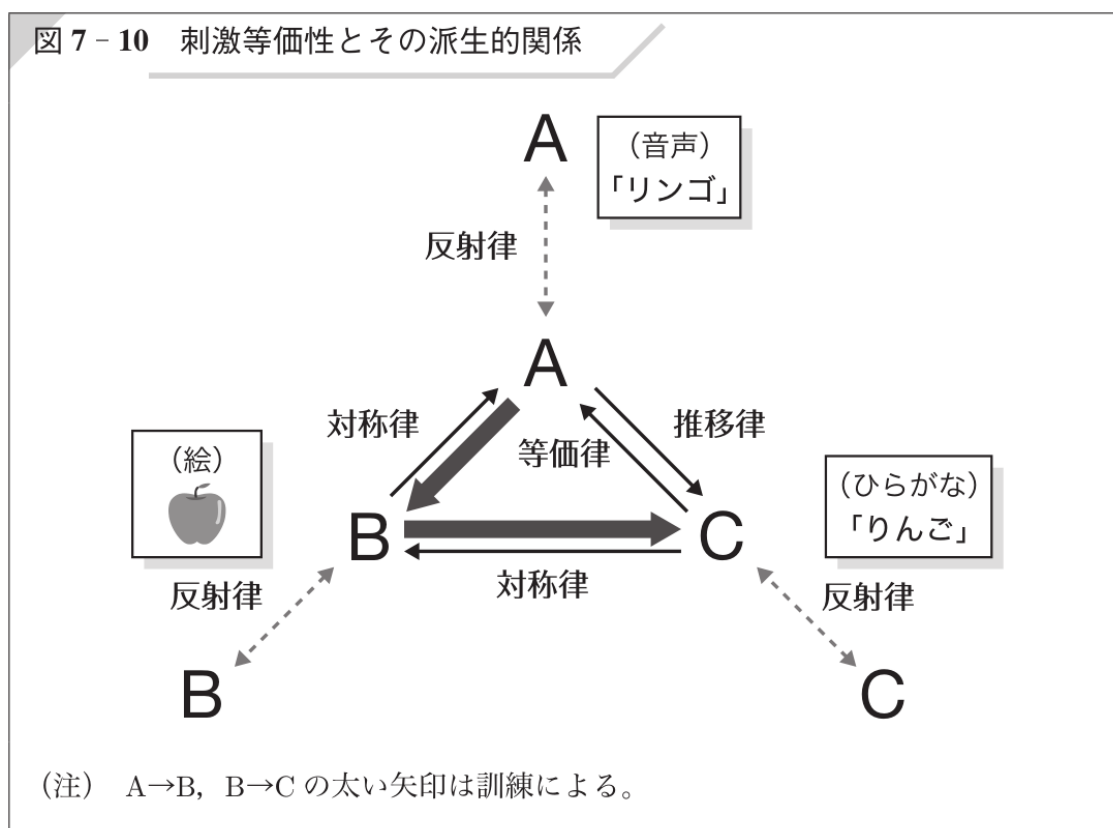


有斐閣アルマ『行動分析学』第3刷補論：
刺激等価性から派生する関係



刺激等価性の研究は、3セットからなる条件性見本合わせ課題間での反応の転移が基礎となっている。図7-10で説明しよう。まず、音声セットの1つとして「リンゴ」という音声の下で絵セットの1つである🍏の絵の選択が強化される。次に絵セットの🍏の絵の下でひらがなセットの「りんご」の文字の選択が強化される。この条件性見本合わせの訓練を行った後、音声セットでは「リンゴ」音声に対して「リンゴ」音声が選ばれ、絵セットでは🍏に対して🍏、ひらがなセットではひらがなの「りんご」には「りんご」が選ばれれば、反射律が成立したといわれる。一方、やはり訓練されていなかった🍏の絵の提示下で正しく「リンゴ」音声が、ひらがな「りんご」の提示下で正しく🍏の絵が選ばれたら、対称律が成立したといわれる。また同様に訓練されていなかった「リンゴ」音声の提示の下でひらがな「りんご」が正しく選ばれれば、推移律が成立したといわれる。さらにこの逆方向である、ひらがな「りんご」の提示の下で正しく「リンゴ」音声が選ばれると、等価律が成立したといわれる。このように、見本合わせの訓練でなされなかった見本刺激と比較刺激の関係が派生的(derivative)に算出される点が、この刺激等価性の重要な点となっている。

(参考文献)

実森正子 (2000) 「再考: 刺激等価性における反射性」『動物心理学年報』50, 199-201.